

1945年8月15日

今日はあの無謀な戦争に敗れた日、戦争が終わった日だ。この日に台風が直撃するのは、私の記憶では初めてだ。書棚から写真の小山仁示先生による『改訂 大阪大空襲』を手にとった。終章「敗戦の衝撃」を一部紹介したい。

1945年(昭和20)8月15日、真夏の太陽が目に痛いばかりにもえていた。この日の正午、ポツダム宣言の受諾を告げる天皇の放送によって、日本国民は3年8か月にわたった太平洋戦争の惨憺たる結末を知った。神州不滅を信じ、すべてを祖国の勝利のためにささげてきた多くの国民にとって、日本の降伏は思いもかけぬ出来事であった。人びとは呆然自失し、あるいは悲憤慷慨した。烈日のもとに厳粛な事実を知らされた8月15日の記憶もまた、この日を経験した者にとっては永遠のものとなった。

当時の日本人の大多数は、世界の情勢や戦局について真実を知らされることなく、軍部による誇大さわる戦果の発表を信じこまされていた。また、天皇に対する絶対的な尊崇の念と忠誠心をうえつけられていた。このような人びとにとっては、敗戦をすぐに民主主義や自由への希望に満ちた出発として受けとることはできなかった。昭和一けた生まれ、典型的な軍国少年だった私も、その例にもれなかった。動員先の十三(東淀川区、現在淀川区)の東洋工作所からの帰途、国体護持、米英両国への復讐を友人と誓いあったものである。

大阪だけで34万4千戸の家屋が焼失し、122万5千人が家を失った。死者1万3千人、重軽症者3万1千人。住居を焼かれ、肉親を失い、あるいはみずから重傷を負っても、祖国の勝利のためということで耐えてきた。当時の日本人のなかで、親子兄弟夫婦、もしくは近い親戚に戦死者が一人もいないというような例はないといってよい。ところが、日本は降伏したのである。なんのための犠牲だったのか、苦しみだったのか。大多数の日本人が虚脱状態におちいったのも、無理はない。

当時、私は生野区猪飼野に住んでいた。私たち日本人は敗戦を悲しみ、呆然としていた。ところが、あちこちの朝鮮人が住んでいる家々からは、夜を徹して酒を飲み、歌いおどっている。にぎやかな声が聞こえてきた。「朝鮮人はなにをしているんや」ときいた私に、父は「朝鮮人は勝ったんや」と答えた。日本人にとっての敗戦は、朝鮮人にとっては勝利であり、解放だったのである。それまでの私の考えを根底からくつがえす体験だった。猪飼野に住んでいたからこそその貴重な体験だった。



(2019年8月15日)